

八戸市：クリエイティブな雰囲気をもつ地方都市

八戸市は中心市街地活性化のみならず定住自立圏の先進事例としても有名であるが、全国有数の漁港を有することから水産加工業が集積し、また 1964 年の新産業都市指定後、三菱製紙をはじめとして急速な製造業の集積が進み、理系の八戸工業大学や八戸高専、起業やスポーツに特色のある八戸学院大学といった特色ある研究・教育機関を有するという強みがある。

八戸市もつクリエイティブな雰囲気は、八戸市直営施設である八戸ポータルミュージアム「はっち」の活動に象徴されている（写真 1）。東日本大震災直前の 2011 年 2 月に中心市街地の真ん中で開館した「はっち」の事業コンセプトは、「地域の資源を大事に思いながら新しい魅力を作り出す」であり、そのコンセプトのもとで、会所場づくり（誰でも気軽に立ち寄れる空間づくり）が進められてきた。「はっち」来館者は、開館後 4 年半で 400 万人を超え、中心市街地に少しずつではあるがにぎわいが戻りつつあるようである。「はっち」の成功の核心は、「はっち」の進めるアート・イン・レジデンスを通じた地域の資源の発見のしかたに凝縮されている。上述の事業コンセプトのもとで「はっち」のアート・イン・レジデンスの取り組みは当初より市民を巻き込むコミュニティ・アートに焦点をあて、地域の資源をアーティストの力を借りて新しい視点から再発見し、地域の課題を解決する試みを積み上げることを重視している。その過程で既存のコミュニティを超えた新しいつながりが生まれ、新しいアイデアを喚起することを目指している。八戸市では、さらに、「はっち」に対面する再開発地区で、新たなパブリック・スペースとして屋根付き広場「マチニワ」とライフスタイル追求型の新しい形態の市直営の書店（ブックセンター）を整備中である。

また、アート・イン・レジデンスでコミュニティ・アートの実践を行ったアーティストの山本耕一郎氏が、その実践の過程で自ら八戸市の魅力に惹かれて移り住み、中心市街地を舞台として「まちぐみ」という継続的なコミュニティ・アートの活動を行っている。「まちぐみ」は、「はっち」をまちなかに展開するという小林眞市長の発想からはじまった「はっち」の事業であるが、現在、すでに 200 名を超える市民が参加し、市民の新しいネットワークができあがっていて、「まちぐみ」は、まちなかの店舗の外観やディスプレイにアートの視点を加えるなどの活動を通じて、まちなかを、人を惹きつける魅力的で面白い場所に少しずつだが確実に変えつつある。また、まちなかの空き店舗をリノベーションすることで、「まちぐみラボ」と名付けられたクリエイティブな雰囲気に満ちたコワーキング・スペースも生まれ、自由な交流の場となっている（写真 2）。

もうひとつの八戸市のクリエイティブな雰囲気を代表するのが、路地の奥にあるバー「プリンス」である。仕事帰りに気軽に立ち寄れるバーでの出会いが、ケミストリーを生み出す様子は、世界でもっともホットなまちと言われるアメリカのポートランドに似た雰囲気を醸し出している。



写真1 「はっち」の自由に立ち寄れるおしゃれなスペース（夜は演劇やミュージックなどのイベントスペースにもなる）と起業スペースのものづくりスタジオ（八戸）



写真2-2 まちぐみラボ（まちなかに出現したクリエイティブ・スペース）（八戸）